

「一般社団法人 ALiS」



ALiS Presents

みんなの伝えたい気持ち

2022.2-3 月

No.11/12 合併号

災害医療への想い





3, 11 東日本大震災

一般社団法人 ALiS 代表理事 新井克哉

東日本大震災から 11 年経ちます。

3 月 11 日は「いろいろな気持ちと思いが募る」にではないでしょうか？

私も「長野県の救護班」として発災 1 カ月後の石巻で支援活動を行ってきました。目の前の光景とその時の気持ちは忘れることはできません。

今回「災害医療への想い」と題して、「東日本大震災」「台風 19 号豪雨災害」「新型コロナウイルス」で活動した中でのそれぞれの経験と想いについて書いていただきました。



震災 50 後の日和見山から石巻港を望む

3・11 東日本大震災 ～救急隊の経験～

長野県 松本市 消防署勤務 N.Hさん

東日本大震災は、2011年(平成23年)3月11日、14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震による災害及び、これに伴う福島第一原子力発電所事故による災害である。この災害は津波、火災などにより東北地方を中心に12都道府県で2万2000人余の死者(震災関連死を含む)・行方不明者が発生した未曾有の大災害である。



当職はこの災害に対し、緊急消防援助隊既定の元、震災発生直後に松本広域消防局から長野県隊第一次派遣隊の救急隊として宮城県多賀城市に出動した。

当時の当職は梓川消防署安曇出張所に勤務しており、出動は救急件数年間200～300件の穏やかな消防署である。

発災当時、当直勤務中で昼過ぎあたりから、頻回な有感地震を感じた。情報収集のテレビからは、パニック映画を思わせる津波の光景が報道されており、しきりに緊急地震速報がテレビから鳴り響き、その報道から東日本大震災の発災を覚知した。その時間は14時を回った頃であった。

当署へ配備されていた救急車は消防組織法第49条に規定されている国庫補助により取得配備され、当時、松本広域消防局内最新の救急車であり、予算取得の条件として緊急消防援助隊への第一出動登録車両として配備されていた。

テレビからの情報から、緊急消防援助隊の要請を署員誰もが予想し、普段から有事の際に使用する個人装備、最低限の食糧、生活用品を再度チェックし招集に備えた。各署一斉放送により緊急消防援助隊出動準備指令が伝えられた。その時間は15時30分頃であったと記憶している。

「内容は18時に消防局へ各隊参集し、出発準備整い次第、迅速出動」

救助隊、救急隊、後方支援隊等々集結確認後、直ちに緊急消防援助隊長野県隊集結場所である黒姫野尻湖PAへ向け7台もの消防車両で松本を出発した。



普段から慣れ親しんでいるはずの上信越道、この時ばかりは多くの自衛隊災害派遣、警察車両、DMAT車両、ライフラインに係る県外からの緊急車両等々のみで一般車両が皆無、その物々しさと緊張感により、この災害の規模を想像することすらできなかつた事を覚えている。

救急車内も大した会話なく、隊員各々から隠し切れない緊張感を感じ取れた。

上信越道から北陸自動車道を更に東北方面へ進み常磐自動車道から災害地入り、野営拠点である宮城県利府町にあるグランディ21駐車場へ長野県隊として参集した。

参集場所までの道のり、被災地の惨状が明るみになるにつれて自動販売機をこじ開け、飲料水を確保しようとしている人々、倒壊した家屋から何かをいそいそと運び出している人々(その家の家人であって欲しいが・・・)、打ち上げられた多数の漁船、横転転覆した多数の車両、大小様々な瓦礫等を横目に午前6時頃に到着した。

直ちに各隊の活動方針について受援側消防本部から指揮版に敷かれた広域地図を使い説明がなされた。その内容には津波による被害区域も概ねではあったが示されており、生活道路の浸水状況、道路崩壊、瓦礫等により通行不可の旨も伝えられた。



当職は救急隊として現地入り、塩釜地区にある消防署へ長野県隊、岡山県隊の救急車10台ほどで救急待機となった。

震災により119番通報システムは破綻しており、駆け込みによる救急要請が主であった。それでも、10台の救急車は休息の間もない程の出動となった。

119番通報システムの復旧は震災発災から二日後であった。

出動に際して、受援側消防職員一名が同乗し、現場到着、収容病院までのナビゲーションが行われたが、先述のとおり道路は破綻し、現場到着にまで時間を要した。また、現着まで徒歩にて浸水個所を腰まで水に浸かり、傷病者に接触したことも幾度となくあった。

出動途上であっても多くの人々から、走行している救急車が呼び止められての救急依頼も絶えなかった。

今でも記憶に残っているのが、出動途上の路上に多くの犠牲者が放置されたままの状態であり、その脇をただただ通り過ぎるしかできなかったことに、無力さを痛感させられたことを鮮明に記憶している。

緊急消防援助隊の活動は基本的には日の出から日没である。一日の活動を終え、野営地に戻る。様々な思いと悔しさを皆、内に秘めての活動終了であったと思う。

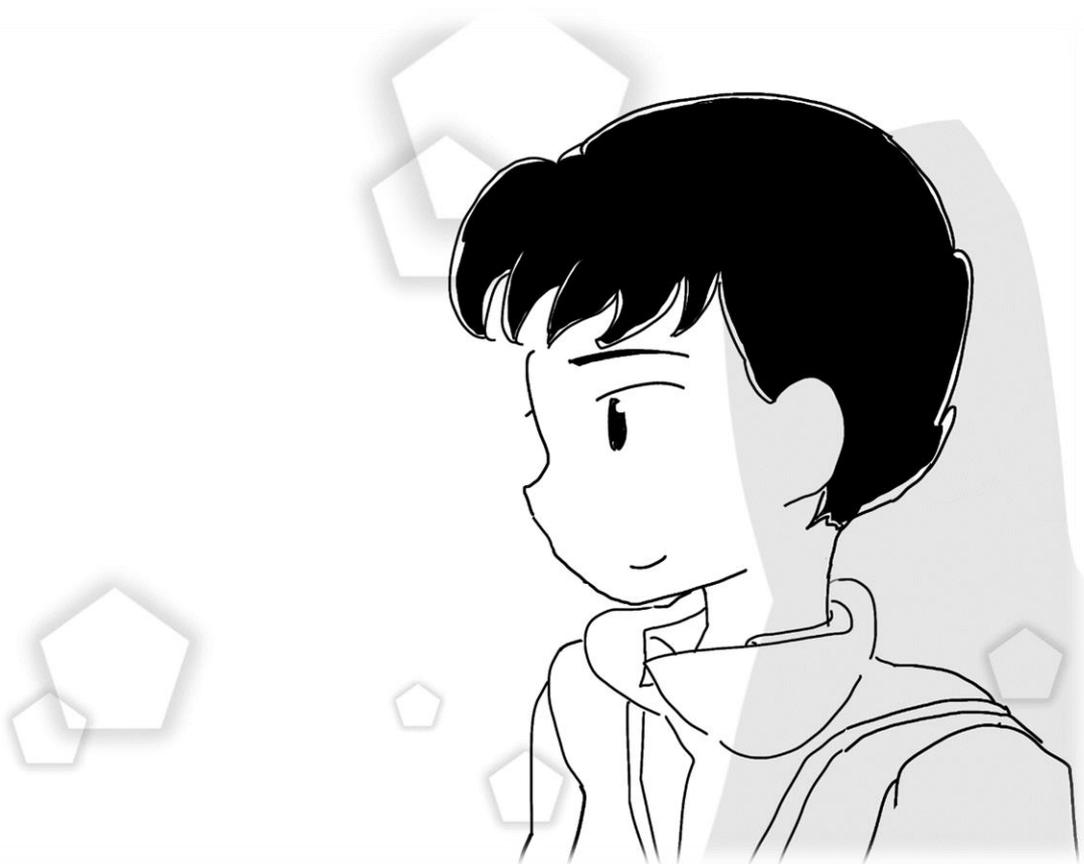


このグランディ21は公営の大きな体育館として平常時は機能しているが、この時ばかりは“遺体安置所”としての機能が課せられ、検視、身元特定等が関係行政により行われている。

雪が降りしきる中、絶えることなく自衛隊、消防団等により連れ込まれる無数の犠牲者、確認のために訪れる親族等により、人々の出入りが絶えることはなかった。

当職等一次隊の活動は4日間に及び活動を展開した。その間に出動した救急活動は50件以上に及ぶ。私たちは、どんな辛いことがあっても災害に立ち向かっていかなければならず、悲しみや苦しみを乗り越え、経験したあらゆる教訓を忘れることなく次に生かして、国民の安心安全を守るため、あらゆる努力を怠らないで精一杯やり続けることが大事だと思う。

以上体験記から



災害医療への思い

～DMAT 業務調整員として～

信州大学医学部附属病院 DMAT 業務調整員 K・Yさん

1. はじめに

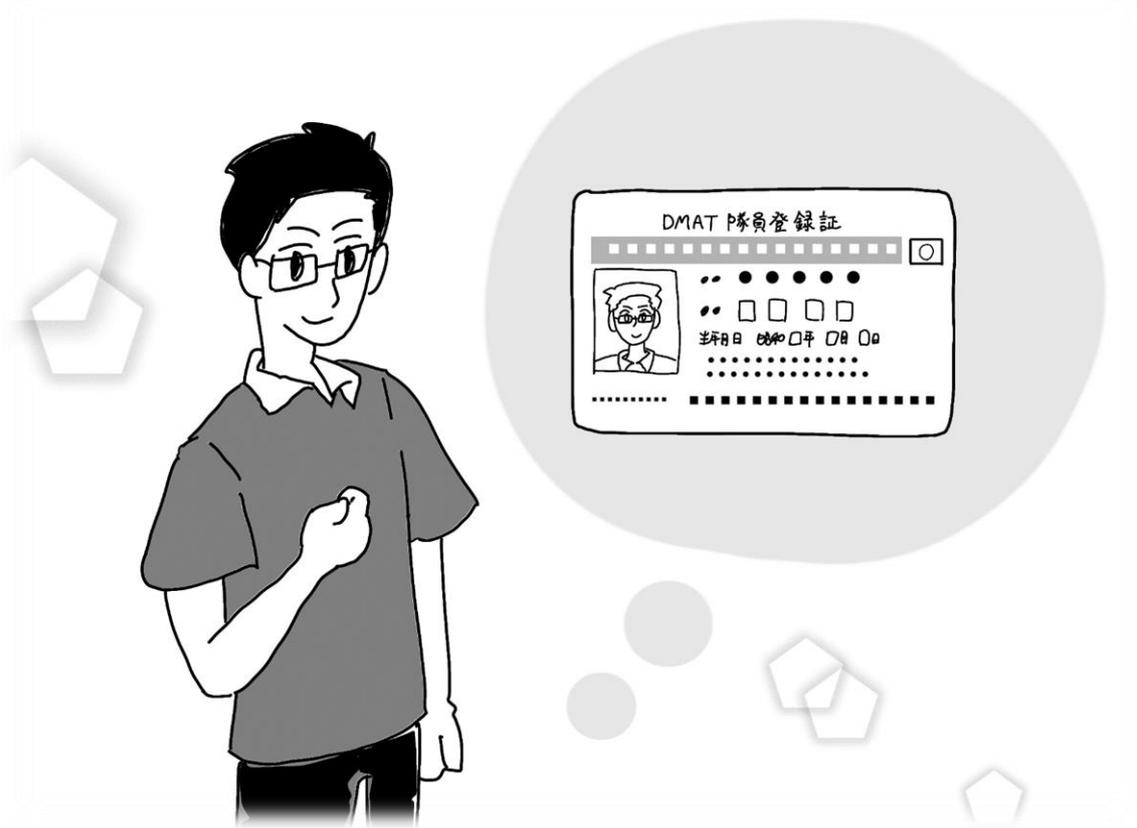
私は長野県内の災害拠点病院・DMAT 指定病院で勤務している事務職員です。私が DMAT 隊員になったのは、2008 年の秋でした。

きっかけは、総務課の庶務業務の担当者だった時、厚生労働省が行っている災害派遣医療チーム(DMAT 研修)の受講生の募集が届き、院内で受講生を探そうと思いましたが、研修内容や趣旨を読んだところ、大規模災害が起きたと時に医師、看護師を連れて災害発生後すぐに被災地に赴き傷病者を治療するという内容に、自身の身の保身から正直に怖いと感じました。そのため、自分自身が恐怖を感じた研修を他の人に薦めるということができず、まずは自分が受講し問題がなさそうだったら他の人にも受講を進めよう、そう思い受講したことが DMAT 隊員になったきっかけです。

2. DMAT 業務調整員とは

DMAT では、医師、看護師以外の事務、薬剤師、放射線技師、検査技師等の職種のことをまとめて業務調整員言います。業務調整員は、Logistics(ロジスティックス)のことで辞書には、兵站(へいたん):戦闘部隊の後方にあつて、人員・兵器・食糧などの前送・補給にあたり、また、後方連絡線の確保にあたる活動機能とされております。

大規模災害時は、電気、ガス、水道が途絶され、通信、道路、物流状況なども不安定な地域に、出動することになりますので、自分達の食事、休息、排泄なども自分達で行いながら、継続して医療活動を行います。そのため、医師、看護師が診療行為を行うのに対し業務調整員は上記の生活環境の確保の他にメインの業務は、情報(収集、記録、発信)と資源(物資、車両、人)の管理を行います。また、病院の救急車で緊急走行の運転を行うこともあります。



3. 出動した 4 つの災害

現在、DMAT 隊員になり 14 年が経過いたしました。この間に東日本大震災(2011 年)、御嶽山噴火災害、神城断層地震(2014 年)、台風 19 号による風水害(2019 年)の 4 つの大きな災害に出動しました。私が担当した活動は、DMAT 活動拠点本部や長野県庁調整本部に入り

情報の収集や発信、記録を主に行いました。また、この活動時に心強く思ったことは、本院の医療チームのみならず、他院の DMAT チームと顔の見える関係が築けているということ。同じ活動場所に複数の DMAT チームが共同して活動を行う際に、平時から訓練や研修を協力して行なっている仲間が側にいることが、横や縦の連携をより強固にしてくれお互いに助け合ったり、アドバイスや工夫が生まれやすく、平時の繋がりがとても大切だと感じました。

4. 日頃の備え

大規模災害は 24 時間 365 日いつ起こるかわかりません。そのため、私は普段から DMAT 活動時に最低限必要だと思う装備をリュックにつめて、どこからでも、いつでも病院や災害現場にかけつけられるように用意がしてあります。また、自身が被災したことも想定し、家庭には備蓄食料やキャンプ道具がありますので、家族の無事が確認できればすぐに病院へ向かえるように備えています。



5. 人の命を救いたい

DMAT 隊員になってから気づいたことがあります。私は高校生の時、人の命を救う仕事がしたいと思い、消防士になることを夢見て 3 年間挑戦しましたが、私には消防士としての職業は与えられませんでした。その代わりに私に与えられた職業は、決してなりたくなかったホワイトカラーの病院事務という仕事でした。しかし、やりたい職業ではなかったものの、勤務を続けていくうちに事務仕事が好きになり、「1. はじめに」に記載したとおりの経緯により DMAT 隊員になり、直接的ではありませんが、医師、看護師と共同して夢で描いていた「人の命を救いたい」という願いが叶う結果となりました。

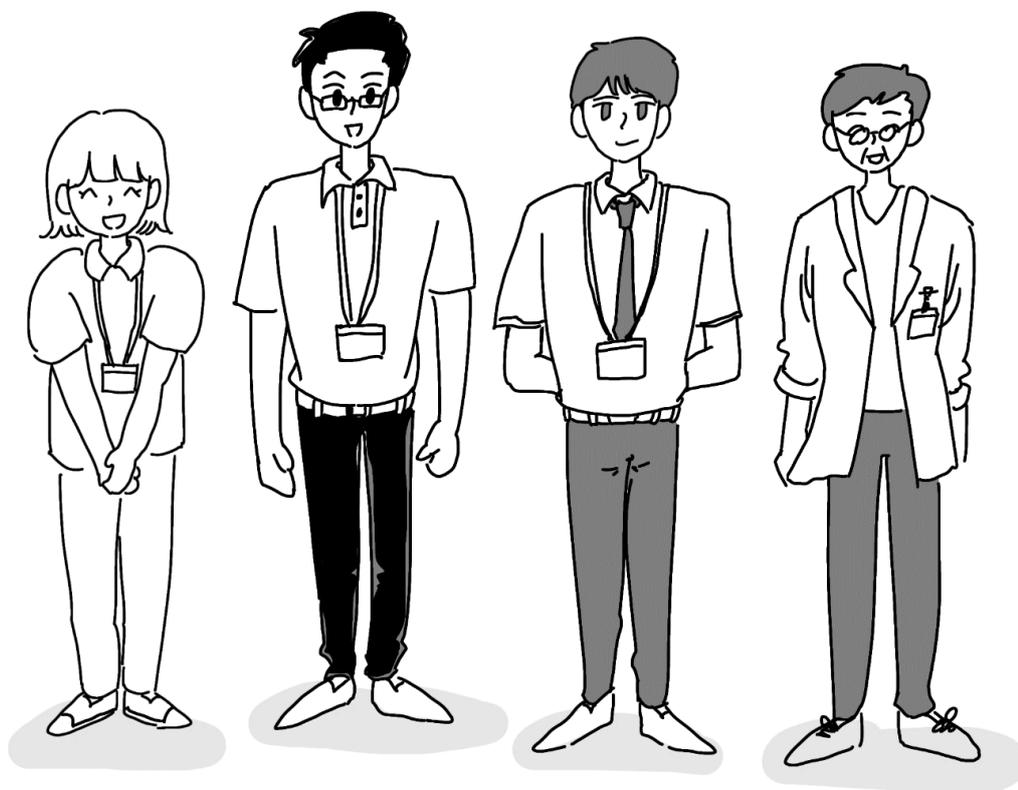


6. DMAT は天職

継続は力なりという言葉のとおり、病院の事務職員も DMAT 隊員としても続けていくうちに自然と経験値が上がり、ある程度 1 人前になったと思います。人の命を救いたいという夢が DMAT 隊員として叶っている事に気づいたとき、自分の天職だと信じて自分の生まれてきた役割と思い活動ができるようになりました。これまで病院の事務職員として経験したことが、事務職員の DMAT 隊員として生かされる場面があります。例えば、よく会議の議事録を作成するためパソコンの入力が人より早いです、そのスキルを活かして、DMAT のミーティングの際にもリアルタイムに記録を作成し、すぐにメールで配信するなどの情報共有が行えます。

7. 今後の取り組み目標

最近特に思うこととして、私も 41 歳となり後身の育成をするような立場になっている事を実感しています。わずかな実災害経験ではありますが、そこで自分が失敗経験をした事を、新人 DMAT 隊員に悪い例として少しでも伝えたいと思います。また、事務職員として新たに iPad を使用した速やかな記録の電子化やロボットを使用した記録方法等を模索し、業務調整員としていざ大規模災害が発生した際に、一人でも多くの方の命を救えるように医師、看護師のサポートをしていきたいと思っています。



台風19号 被災者と支援者を経験して

長野赤十字病院 DMAT 隊員 T.T さん

2019年10月。

私は20日に控えた長野県総合防災訓練(会場:長野市)に向け、関係機関と調整して訓練準備を進めていました。

10/12(土)も、台風の接近を気にしつつ、いつも通りの病院勤務。

夕方次第に風雨が激しくなる中帰宅し、夕飯を食べていたところ県庁からの呼出で登庁しました。そしてこの時点ではこれからの1週間に起こることは全く想像していなかったのです。

いつものように「長野は山に守られているから大丈夫だろう」という何の根拠のない思い込みでした。



実家は後に決壊した千曲川沿いの長沼地区。

刻々と水位を増す千曲川の情報収集する傍ら、実家にいる弟と連絡をとって洪水に備えていました。

明け方、定点カメラで流木が堤防を“スーッ”と越えるところを見ていよいよ本気でまずいと思ったのをよく覚えています。

その直後、決壊情報が流れ、DMAT 派遣が決定されました。私は実家が被災したため県庁での活動は後続隊に引継ぎ帰宅することとなりましたが、実家に残っていた父と弟が無事であること、床上浸水になったことを確認出来たので病院に戻る事に。

そのまま DMAT 活動拠点本部設置の立上げを手伝うこととなり、夕方になってようやく実家の様子を見に行けました。

避難で留守になった実家の夜間の治安を考慮して、その晩は車中泊で様子を見ながら夜を明かしました。



翌朝病院に行くと県内外から参集した顔馴染みの DMAT の方々がいて
ホッとしました。

私はというと保健医療調整会議(後の HANA)の設置に向けた調整に
追われ1日が終わってしまいました。

10/15、この日は朝の会議だけ出席して通常業務に入る予定でしたが、
上司から『今日は休みにしたから』と言われました。

ちょうど派遣調整をしているところにそう言われたので、『行ってこい!!』
と言われたと理解した私は搬送調整のため豊野に向かいました。

後に上司に確認したところ、「休みなく活動し.実家も被災して大変だろう」
と、休みにしてくれたそうです。(冷静に考えればそうですね。)

災害時は正確な情報伝達と冷静な判断が大切だと改めて内省しました。

そんな勘違いがきっかけでしたが、初の現場への派遣を体験。本部活動
が中心だった私にとって、現場で見た光景は衝撃的なものでした。

たまたま数ヶ月前に娘のダンスで慰問したばかりの施設。知り合いの
スタッフの方も多く、衝撃を受けながらも、少しでも力になりたいと
強く思いました。そこでの DMAT の主な活動は搬送と、施設の清掃、
片付け・・・ドラマなどで見るような災害現場からの救助といった活動で
はなく、『掃除』でした。しかし DMAT という任務を受けての隊員です、

「全ては被災者のために」という精神
で行う業務では清掃も片付けも、
とても大切なミッションだったと
思います。



10/16、かわいい末娘の誕生日でした。

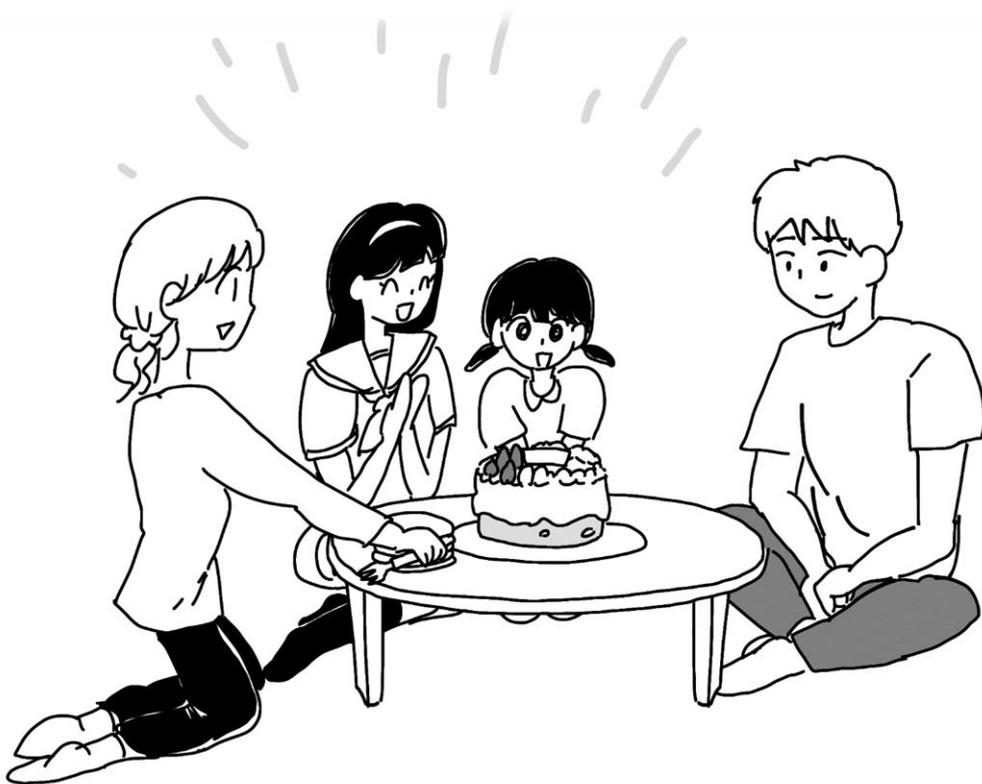
ようやく休務日となり、実家の片付けに向かいました。親戚、友人沢山の方にお手伝いいただきながら実家の片付けをしました。

その日の夜、ささやかに 1 歳の誕生日のお祝いをしたのですが、普段の何気ない日常がとても幸せなことだと改めて感じました。

その後、罹災証明書も作成したり HANA に引継ぎをしたりと激動の 1 週間はあっという間に過ぎました。

今回の体験を通して、普段からの準備の大切さや、支援に来てくれた時のありがたさと、そして日常生活を送れる事の尊さなど多くの学びを得ました。

この学んだ事を大切に、今後の活動にいかしていきたいと思います。



日本の日常が非日常に変わった瞬間 ～災害医療の新たな局面～

福井県 日本 DMAT インストラクター 看護師 I.H

2019年12月、中国武漢で最初に確認された新型コロナウイルスが、世界中で感染者が確認されるようになった。2020年1月には日本国内でも初の感染者が確認され、同年2月横浜港に到着したクルーズ船から新型コロナウイルス感染者が多数確認された。この事態を受け厚生労働省からDMAT・DMAT ロジスティックチーム隊員へ派遣要請があった。

新型コロナウイルスという新興感染症が世界中に波及していく中「そのうち日本にも入ってくるだろうな」と感じていた中、起こったクルーズ船への派遣要請。私は「もうこれは日本全国に拡大し自分の住んでいる県にも入ってくる」と確信し、所属県と所属医療機関に確認したが新興感染症対応ということで船内活動に難色が示されたので神奈川県庁での本部活動を行うことで許可を得た。

全国のDMATの仲間達が船内の最前線で活動していることに歯痒さを感じながらも神奈川県庁で活動を行った。この頃は神奈川県を始め日本



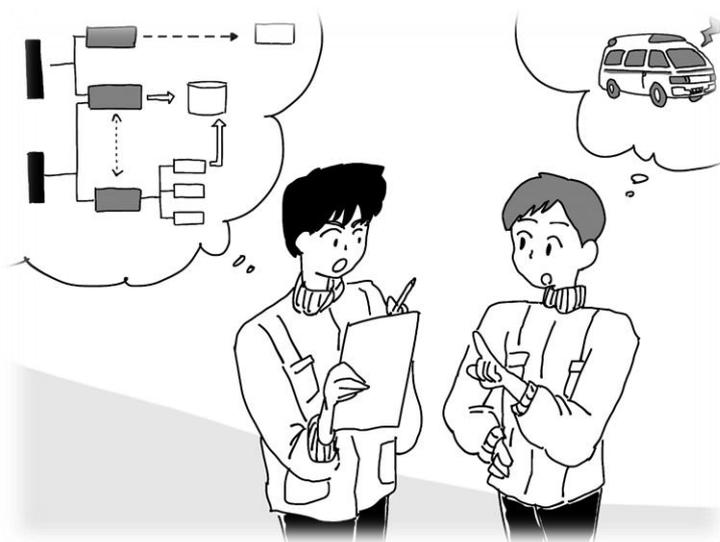
全国ではまだまだマスクをしている人は少なく、街中で遅くまで飲食している人が沢山おり普段通りの生活が送られていた。神奈川県庁内とTVで観るクルーズ船の映像だけが非日常であった。

神奈川県庁内での本部活動では、船内で隔離されている約 3700 人の乗員・乗客の中から時間経過と共にどんどんと新規陽性の情報が入り、神奈川県内・近隣県の受け入れ先・搬送手段の調整、陽性者の健康状態の情報整理が必要な業務であった。次々と入ってくる情報に翻弄されたものの優秀なリーダーの下、DMATが今までの実災害で培った知識と経験を活用し 2 月末には全乗員・乗客の下船が完了した。このクルーズ船の出来事は日本国内パンデミックの始まりであり、この経験は自県での新型コロナウイルス対応に非常に役立つことになった。

2020 年 3 月、自県において新型コロナ陽性患者が初確認され、その後も続々と陽性者が確認されるようになった。4 月には、人口 10 万人当たり



の陽性率が全国上位となり病床確保が困難となった。日々増加していく陽性者に対して、基盤も経験もない自県にとって一部の医療機関に集中して入院させるしか方法はない中で、県内 DMAT に協力要請があり県庁内に調整センターを設置することになった。神奈川県での経験を



生かし、マニュアルと搬送フローを作成し重症度に応じて入院を分散させることで医療機関の負担を軽減することが出来た。

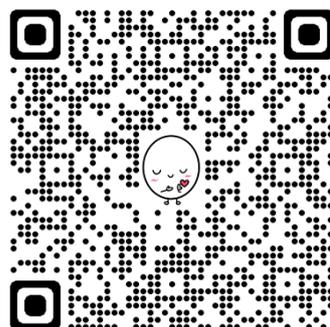
2021年現在、始まりから2年が経ち、新型コロナは第6波を迎え未だ猛威を振るっている。DMATの活動要領には感染症対応が新たに明記され、感染症も災害対応の一部となり災害医療も新たな局面を迎えている。災害医療は経験の積み重ねと反省の繰り返しである。手探りで始まった新型コロナの対応も反省を繰り返し現在に至っている。

今ではマスクをすることが日常になり自粛と我慢の毎日である。未だに出口の見えないこの状況に一人でも「防ぎ得る災害死」を減らせるように全国の医療者を含めDMATも頑張っています。

いつかまたマスクをせずに自由に外出できる日常を迎えられます様に。



災害医療に携わる仲間への応援メッセージ



一般社団法人 ALiS の活動



「All around Life Supporter」

ひとりのいのち、みんなのいのちのために、活動する

皆さんのサポーター

「いっぽ前に出て、手を伸ばす」

地域医療・救急医療・災害医療に

私たちは「伝える」・「支える」・「伺う」3軸で

多角的に活動を行い、皆様と一緒に医療の底上げと

医療者を応援します。

ホームページ



インスタ、フェイスブックも公開中

ALiS メンバー募集中！

一般社団法人 ALiS 代表理事 新井克哉
メール:alissongben@gmail.com